

「貝がら節祭り」に関する調査報告

—2013（平成25）年度「郷土の伝統音楽の再生を担う学生参画による《貝殻節》の教育実践」活動報告—

Observations of “Kaigarabushi Festival”

天川淑貴，石田麻莉奈，白根裕也，高田瑛莉香，
立神千裕，徳本千恵，後原寛之，鈴木慎一郎

AMAKAWA Yoshitaka, ISHIDA Marina, SHIRANE Yuya, TAKATA Erika,
TATSUKAMI Chihiro, TOKUMOTO Chie, GOHARA Hiroyuki, SUZUKI Shinichiro

キーワード：貝がら節祭り，浜村，歴史，広報，踊り

Key words: Kaigarabushi Festival, Hamamura, history, publicity, dance

はじめに

わらべ唄や民謡などの郷土の伝統音楽は、口伝、つまり、口伝で継承されることが難しくなりつつある。私たち7名の出身の内訳は、鳥取県5名と、兵庫県1名、広島県1名である。鳥取県出身の人が5名もいるが、調査前の段階では貝殻節について内容を知らない人がほとんどで、知っている人は1名しかいなかった。そこで、鳥取県の民謡である《貝殻節》について調査することになった。

『日本民謡大観（中国篇）』によると、以前の鳥取では、帆立て貝がよくとれ、その貝をとるとき、一斉に櫓をこいで力任せにとる漁法を用いた¹。この舟子たちが櫓を押しながら歌ったのが《貝殻節》である。「ヤサ ホーエーヤ ホーエヤエ ヨイヤサノサッサ」という特徴のある歌詞は、賀露神社に伝わる「ホーエンヤ舟」の唄が由来となっている。しかし、帆立て貝がとれなくなり、漁と共に《貝殻節》も廃れていった。その後、昭和初期に、新民謡運動が始まり、《浜村温泉小唄》をつくることになった。その際、鳥取県師範学校の卒業生の三上留吉が、当時、鳥取県師範学校附属小学校の教師であったころ編曲を行い、松本穰葉子が歌詞を補い、三味線をつけ、1933（昭和8）年、コロンビアレコードから発売された。1952（昭和27）年、「全国民謡の旅」で第一位になった。その後、鈴木正夫がレコード等で紹介し、鳥取県の代表民謡となった。

本調査の目的は、鳥取県の代表的な民謡である《貝殻節》と地域との関係に着目し、郷土の伝統音楽の継承について検討することである。調査の方法は、次の3点である。第一に先行研究について検討する。第二に《貝殻節》の音楽的特徴

を概観する。第三に「貝がら節祭り」に関する調査を行う。

1. 先行研究の検討

《貝殻節》に関する先行研究として以下の文献が挙げられる。

- ・小寺融吉『日本民謡辞典』吉生書院、1935年、pp. 100-101。
- ・蓮仏重寿『三上留吉の一生』久松文庫、1963年。
- ・日本放送協会編『日本民謡大観（中国篇）』日本放送出版協会、1969年、pp. 102-105。
- ・長坂一雄『日本民謡全集4（近畿・中国・四国編）』株式会社平文社、1975年、pp. 148-151。
- ・松本穰葉子『鳥取県民謡百選』牧野出版、1977年、pp. 12-20。
- ・中山明慶「貝殻節考」『鳥取大学教育学部研究報告：人文・社会科学』第35巻、鳥取大学教育学部、1984年、pp. 63-78。
- ・『鳥取県大百科事典』1984年、pp. 153。
- ・野津龍『鳥取県祭り歳時記』山陰放送、1985年、pp. 128-130。

このように多くの貴重な先行研究があるものの、《貝殻節》の由来や音楽や歌詞の特徴を取り上げたもので、地域との関係に着目した研究は行われていない。

2. 《貝殻節》の音楽的特徴の概観

小泉文夫『合本 日本伝統音楽の研究』（2009）によると、日本の民謡には、表1に示した通り、「八木節様式」と「追分様式」という二つの様式が存在する。

表1 八木節様式と追分様式

八木節様式	追分様式
<ul style="list-style-type: none"> ・リズムが明確 ・音域は一般的に狭く、誰でも歌える範囲内にとどまる ・集団でうたわれるものが多い ・伴奏楽器としては、太鼓や三味線が適する 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムは一般に不明確で、拍節法はほとんど存在しないと考えられる ・音域は一般に広い ・単独でうたわれるものが多い ・伴奏楽器としては、尺八が適する

出典 小泉文夫『合本 日本伝統音楽の研究』音楽之友社、2009年、p. 84。

実際に音源²を視聴した結果、《貝殻節》は、表1と照らし合わせると、リズムが明確で、伴奏楽器として三味線等が使用されている点から、八木節様式であることを確認した。

3. 「貝がら節祭り」に関する調査

ここでは「貝がら節祭り」に関して、歴史、広報、踊りの視点から述べたい。

1) 歴史

私たちは2013（平成25）年8月2日・3日に開催された「貝がら節祭り」に実際に参加し、「貝がら節祭り」の今と昔がどのように変化していったかについて明らかにしたいと思った。

先行研究の中山明慶「貝殻節考」（1984）によると、「貝殻節名人大会」が開催された点について触れられているものの、「貝がら節祭り」については言及されていない³。

『新修気高町史』（2006）によると、「貝がら節祭り」は、一月遅れの「七夕祭り」として出発した⁴。内容としては、8月5・6日に演芸・花火をメインにし、浜村砂丘公園を主会場として行われていた。その後、1971（昭和46）年に「貝がら節祭り」に名称を変更した。それが今現在にも至っている。

その後会場は中央公民館前や浜村駅前へと移された。かつては、踊りは浜村駅周辺の人たちだけが参加していたが、1987（昭和62）年に「見る祭りから参加する祭り」へと移行された。これはテンポのいい踊りに変えて参加が楽しくなるようにということをコンセプトに基づき、踊りを変えた。また、1990（平成2）年には、イベントを全部刷新した。ここでのコンセプトは「潮」とし、座敷歌から労働歌への帰還をテーマに、原点に立ち返るためにイベントを構成し直した。

現在1日目は船磯海岸で水中花火大会・名物荒磯焼等多彩なイベントが繰り広げられ、人出も多くなっている。2日目の温泉街・観光道路での貝がら節総踊りには1000名以上の踊り子たちが繰り出し、気高町最大のイベントとして定着している。

また、文献で得られなかった情報を、実際に気高町総合支所に赴き、気高町観光協会事務局長の中村勲氏、鳥取市気高町総合支所地域振興課主事の田中俊行氏に聞き取り調査を行った（2013年11月20日）⁵。聞き取り調査において中村氏は「町内で一番大きい祭りということがあったので、町を代表する祭りということで、《貝殻節》の発祥の地という自負があったので「貝がら節祭り」と命名しました」と説明する。気高町の人口が約1万人であるから、だいたい10人に1人が踊りに参加していたということになる。現在は踊り子さんの参加人数が700人ぐらいに落ちている。

先述の「見る祭りから参加する祭りへ」と移行されたことに関連して、2日目に踊り子たちによる貝がら節踊りについて、中村氏は「観光協会が手持ちの浴衣がけっこうあったのですが、それを貸し出してそれを着て参加していましたので、同じ衣装というような形の浴衣になったのですが、同じ衣装じゃないといけないということではなかったのです。だから連によっては、自分たちで衣装を作って、参加しているところもありました」と回想する。

2) 広報

次に「貝がら節祭り」の広報について検討する。私たちは祭りを宣伝、運営するためにどのような取り組みがされているのかについて調査した。実際に新聞の折り込みとして配られた「貝がら節祭り」のチラシを見ると、1日目は芸能ステージや太鼓演奏、また今回は気高町を中心とした短編映画が撮影され、そのキャスト・スタッフの舞台挨拶も行われた。さらに、祭りの最後には、大水中花火大会があった。2日目には、中学生が「正調貝がら節踊り」を踊り、総踊りでは学校や地域ごとで連をつくり多くの人が一斉に踊った。私たちも実際に飛び入りで参加した。

聞き取り調査によると、チラシは千代川以西、青谷・鹿野の一部に配られていることが分かった。多くの人に知ってもらいたいが予算の関係で、この範囲に限定されている。

チラシの配布だけではなく、「鳥取市公式ウェブサイト」にもチラシが掲載されている。また、ケーブルテレビ「いなばぴよんぴよんネット」の文字放送でも祭りの少し前から広報が行われていた。

次に、祭の運営費用について触れたい。「貝がら節祭り」実行委員の予算は、主に町内の商売をやっている方や個人の寄付金、鳥取市の補助、今までの祭りの売り上げの3つである。配布されていたチラシの裏には、寄付をした企業・会社の名前が記載されている。具体的な予算の金額は現在では600万円ほどで、多いときでは1000万円近くの予算があったそうだが、合併を境に年年予算が減ってきている。

3) 踊り

最後に「貝がら節祭り」で私たちが実際に参加した総踊りの特徴の分析を行う。

総踊りには、練習をして入賞を目指す「踊り子連」と、誰

でも自由に参加できる「勝手連」の2つある。今年の総踊りには、約 660 名、15 の踊り子連が参加した。

「貝がら節踊り、踊って楽しい踊りです。見物のみなさんも参加してください。「勝手連」と書いてあるプラカードの後に続いて参加していただくことが可能です」というアナウンスがあり、私達も実際に勝手連に参加した。

『新修気高町史』(2006)によると、1987年に「見る祭りから参加する祭り」へと移行し、曲はアップテンポにアレンジし、踊りも新しく振り付けられた⁶。編曲は、気高町出身のプロの編曲家である鈴木成弘氏、振り付けは、元気高中学校教諭であった梅津洋子氏によってつくられた(《新曲貝がら節》)。

総踊りの特徴について、総踊りを録画したビデオに基づき、分析した。その結果、次の2点が挙げられ、誰にでも踊りやすく振り付けられていることが明らかとなった。

- ・「こーいーで」などの掛け声に合わせた振り付けが多い。
- ・右と左で同じ動作をすることが多い。

聞き取り調査の中で中村氏は、「もう一度踊りとか編曲についても、もうそろそろ考え直さないといけない時期かなと思っています。その当時と違って今は非常に情緒的な祭りということが、かなり好まれる傾向になっているので、もうちょい情緒的な貝がら節…、本来の祭りの方に変えていくというコンセプトをとりながらやっていきたいと思っています」と述べ、本来の情緒的な貝がら節祭りへの移行を検討中であることが分かった。なお、「貝がら節祭り」の1日目には、芸能ステージにおいて、本来の貝殻節踊りが披露される場面もあった。

おわりに

以上、本調査で明らかになったのは、以下の点である。

- ・「貝がら節祭り」は、一月遅れの七夕祭りとして出発し、1987(昭和62)年に「見る祭りから参加する祭り」へと移行した。多い時には、気高町の人口の10人に一人が踊りに参加していた。今は、700名ぐらいだが、気高町最大の祭りとして定着している。
- ・プログラムについては、集客するために様々な催し物が用意されていた。普及についてはチラシ、ウェブサイト、ケーブルテレビによる宣伝が行われた。「貝がら節祭り」は予算の減少などにより、広い範囲での宣伝が難しいが、祭を普及するための工夫を今後していきたいと考えている。
- ・総踊りには、練習をして入賞を目指す「踊り子連」とだれでも自由に参加できる「勝手連」の二つあることが分かった。また、1987(昭和62)年に見る祭りから参加する祭りへと移行したことで、曲はアップテンポにアレンジされ、踊りも新しく振り付けられたもので、現在も踊られているが、本来の情緒的な「貝がら節祭り」への移行を検討中である。

【謝辞】

本稿を作成するにあたり、気高町観光協会事務局長の中村勲氏ならびに鳥取市気高町総合支所地域振興課主事の田中俊行氏からの協力を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。



【付記】

本実践は、平成25～27年度特別経費事業「郷土の伝統音楽の再生を担う学生参画による《貝殻節》の教育実践」の助成を受けている。

【注】

- ¹ 日本放送協会編『日本民謡大観(中国篇)』日本放送出版協会、1969年、pp. 103-105。
- ² DVD『日本の民謡②』小学校音楽鑑賞用教材集7、NHKエンタープライズ、2011年、NSDX-15207-7。
- ³ 中山明慶「貝殻節考」『鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学』第35巻、1984年、pp. 63-78。
- ⁴ 新修気高町誌編纂委員会編『新修気高町史』総合印刷出版、2006年、p. 660。
- ⁵ 「「貝がら節祭り」に関する聞き取り調査」『地域教育学研究』6巻1号、2014年、pp. 97-99。
- ⁶ 新修気高町誌編纂委員会編、前掲書、pp. 660-661。